Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2016, Vol.25, 203-215

論 文

中学生における仲間関係の発達と受容感およびネット利用との関連

中　島　浩　子［鹿児島大学大学院教育学研究科］
関　山　　徹［鹿児島大学教育学系（教育実践総合センター）］

Development of peer relationships: From the viewpoint of sense-of-acceptance and internet use

NAKASHIMA Hiroko・SEKIYAMA Toru

キーワード：チャム・グループ、ピア・グループ、ギャング・グループ、学校適応、SNS

【要約】

本研究では，仲間関係の発達についての尺度を構成し，受容感およびネット利用との関連を明らかにすることを目的に，中学生を対象として，調査を行った。まず，保坂・岡村（1986）の「ギャング・グループ」，「チャム・グループ」，「ピア・グループ」の仮説にもとづき，「ギャング」「チャム」「ピア」の３つの因子からなる尺度を作成した。次いで，「ピア」と「チャム」の得点の高低を基準にして４群を設定し，検討したところ，受容感との関連では，「ピア」が高い者は，「ピア」が低い者と比較して，受容感が高くなることが示された。また，ネット利用との関連においては，SNS の利用と友だちとのつきあいに対する意識に関するの項目について，「ピア」が高く「チャム」が低い者のみが，他の群よりも SNS を利用したほうが，友だちとのつきあいがうまくいくとは思っていないことが明らかになった。これらの結果から，「ピア」の発達段階の特徴を持つ者は，「ピア」の低い群より受容感を得られていること，ネットの利用においては，自立した個人として友だちとのつきあいを行う意識を持っていることが推察された。

Ⅰ．問題と目的

友人関係と学校適応に関するこれまでの研究において，青年期は友人関係の重要性が高まり，友人との関係が学校への適応感と関連していること（大久保，2005）や，対友人適応が欠席願望を抑制することが明らかにされている（本間，2000）。また，「友人関係」は，中学生の学校ストレッサーの１つであり，抑うつ・不安感情と高い関連性があることが明らかにされている（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992）。これらの研究は，友人関係の状況が学校への適応，また不適応に大きく影響していることを示している。一般的に青年期になると，友人と過ごす時間が両親や家族との関わりよりも多くなる。特に中学生以降では仲間意識や親密さの欲求は強くなり，その欲求を満たす中心的な役割は友人との関係が占めるようになる。そのため，青年期において，友人との間に親密な関係を築くことは，日常生活を適応的に過ごすためにとりわけ重要な意味をもつであろう。その一方で，一見すると親密な友人関係であっても，心理的適応や学校適応につながっていないことを明らかにしている研究もある。石本（2011）は，中学生においてグループ境界が強固であることは，心理的適応および，学校適応と負の関連があることを明らかにしている。有倉・乾（2007）は，自分の所属する仲間集団の排他性が高いと感じている児童・生徒は，そうでない児童・生徒より学級適応感が低いことを明らかにしている。このように友人関係のなかでも，仲間関係に焦点を当てることで，友人関係と学校適応感との関連をより詳しく明らかにすることができるのではないか。

友人関係による適応が図れない場合，または適応状態から不適応へと陥ってしまった場合，不登校の状態に移行することも少なくない。平成 26 年度の「不登校」を理由とする児童生徒数は，小

学校は 25,866 人（前年度より約２千人増加），中学校は 97,036 人（前年度より約２千人増加）で，依然として多い状況にある（文部科学省，2014）。

平成４年の「登校拒否（不登校）問題について（報告）」においては，「登校拒否は誰にでもおこりうること」という基本的な視点に立脚し，学校は，児童生徒にとって自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所（「心の居場所」）としての役割を果たすことが重要であると指摘している（文部科学省，1992）。平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば，中学生では，不登校となったきっかけとして「本人に係る状況」の「無気力」（26.2％），「情緒的混乱」（26.2％）に次いで，「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（15.9％）の該当者が多い（文部科学省，2014）。このことから，不登校の要因として，友人関係が及ぼす影響は小さくはない。また，友人関係における発達段階を考慮することも重要であろう。そこで，本研究では，不登校に対する学校における予防的取り組みとして，どのような友人関係が学校への適応につながるか，友人関係を発達的側面からとらえていく。

友人関係を発達的側面からとらえた研究として，保坂・岡村（1986,1992）の研究がある。保坂・岡村は，エンカウンター・グループの事例研究において，仲間関係の特徴として，「ギャング・グループ（gang-group）」「チャム・グループ（chum-group）」「ピア・グループ（peer-group）」の３つの位相があることを見出した。ギャング・グループとは，同一行動による一体感を特徴とする同性同輩集団で，男子に多く見られるギャング・エイジ（gang-age）の集団である。チャム・グループは，同一言語による一体感の確認を特徴とする同性同輩集団で，女子に多く見られる集団である。「チャム」は，Sullivan H.S.（1953）が前青年期における同性同輩の親密な友人を「chum」と定義したことに由来する。ピア・グループは，自立した個人として尊重し合い，異質性を認めることが可能な集団である。児童期後期から思春期にかけての子どもたちの仲間関係は，①ギャング・グループ（小学校高学年頃），②チャム・グループ（中学生頃），③ピア・グループ（高校生頃）の順に発達とともに変遷するという仮説を提唱している。この仲間関係の発達の概念を用いて行われている研究として，斎藤（1986），手塚・古屋（2001），黒沢・森ら（2003）の研究がある。

斎藤（1986）と手塚・古屋（2001）は，保坂・岡村の仮説にもとづき，仲間関係の発達について「ギャング・リレーション」「チャム・リレーション」「ピア・リレーション」の３つの因子を抽出している。斎藤（1986）は，友人関係が，ギャング，チャム，ピアの順で変化すること，小学高学年生では，ギャング・グループが中心で，中学生では主に，チャム・グループ，その後高校生では，ピア・グループが中心となることを示している。しかしながら，尺度のうちチャムの項目については，保坂・岡村が定義している内容とは異なっている。手塚・古屋においては，小学校５年生から，大学１年生までの発達的変化を検討し，gang-relation，chum-relation，peer-relation の３つの様式に，poor-relation と rich-relation を加えた５つのグループに分類した。このなかで，チャムからピアへの変化はあいまいであり，チャムとピアは，併存する特徴があると指摘している。また，黒沢・森ら（2003）は，発達段階のもつリスクファクターを含めて実証的に検証することを目的として，「ギャング・チャム」，「ピア・プレッシャー」，「ピア」の３因子からなる尺度を，より臨床的な視点から開発した。ここでは，「ギャング」「チャム」「ピア」の３因子でなく，ギャングとチャムの項目が混ざり合った因子が抽出されており，そのことからギャングとチャムは，対象年齢層集団によって分離・独立して認知されていない可能性があると述べている。また，「ピア・プレッシャー」は仲間集団への同調圧力であり，仲間関係の発達段階に潜む側面として重要であると指摘している。

このように，保坂・岡村の仲間関係の発達の仮説を用いて行われている研究は数が少なく，また，開発された尺度は，因子構成が異なっている。また，ギャングとチャム，チャムとピアが併存するという結果となっていることから，それぞれの発達段階の特徴について改めて検討する余地がある。そこで，仲間関係の発達段階の仮説にもとづき，「ギャング」「チャム」「ピア」のそれぞれの

発達段階についてより的確に検討することが可能な尺度を開発することを第１の目的とする。

第２の目的は，この作成した尺度を用い，仲間関係の発達と受容感との関連，ネット利用との関連を調べ，友人関係および学校における心理的適応について検討することである。はじめに，受容感との関連を調べる。文部省が，平成４年に不登校に関する報告書にて，学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱して以降，心理的な意味を持った「居場所」という言葉が広く用いられるようになっている。このように，学校適応において「居場所感」は重要な要素であるといえる。「居場所感」の要素のなかでも「受容感」は，集団内で個人がポジティブな感情をもたれていることが適応的であるとされることから，友人関係の適応に最も関係すると考えられる。そこで，本研究では，仲間関係の発達と受容感との関連を調べることとする。

さらに，近年のネットの利用との関連についても調べることとする。携帯電話やスマートフォン等のネット端末の急速な普及は，友人間のコミュニケーションに大きな変化をもたらしている。ネットによる友人同士のささいなすれ違いから，友人間のトラブルやいじめに発展することが大きな社会問題となっている。平成 25 年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」におけるいじめについての調査では，いじめの様態の内容として，「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる」の項目が昨年度と比較し，中学生で 5.8％から 8.8％に，高校生で 14.8％から 19.7％に増加した（文部科学省，2014）。これは，ネットを介したいじめが増加傾向にあることを示しているといえよう。ネットによるいじめやトラブルの他，日常的に友人とのネットを介したコミュニケーションを頻繁に行うことで，関係性を保つことに疲れてしまう状態に陥ることも明らかになってきている。このようなネット利用と友人との関係についての研究は，まだ多くは行われていない。小寺（2009）は，若者の mixi 利用者を対象とした調査より，既存の友人と SNS を通して日常を気軽に知ることができること，SNS 利用の基盤となっているのは「既存の関係の強化」であり，既存友人との関係の発展・維持のために SNS を利用していることを明らかにした。また，加藤（2013）は，高校生を対象にして，SNS を利用する理由について「友人との活動の質問紙」（榎本，2003）とネットの利用との関連を心理的側面から調査している。この中で加藤は，SNS でのやりとりは，榎本（2003）が尺度を作成した当時には一般的に見られなかった活動であることから，この尺度の項目に含まれてはいないが，現在の高校生の SNS でのやりとりは，既存の友人・知人との「閉鎖的活動」を活発化させ，親密性を高め合っていると考察している。これらの研究では，ネット利用と友人との関係に言及しているが，仲間関係の発達との観点からは研究されていない。そこで，仲間関係の発達とネット利用との関連を明らかにし，仲間関係の発達段階と友人間でのネット利用の動機について考察することにする。今後もこのようなネットを通じた親密な友人との交流は拡大する可能性が高く，ネットを介した友人間のトラブル等に対する予防的な教育がますます重要になるだろう。ネット利用と友人関係との関連を明らかにすることは，ネット利用における予防的な教育や，生徒の良好な友人関係の構築に寄与するものと考えられる。

Ⅱ．研究１　仲間関係の発達についての尺度の作成と信頼性および妥当性の検討

１．目的

保坂・岡村（1986,1992）の「ギャング・グループ」「チャム・グループ」「ピア・グループ」の仮説にもとづき，仲間関係の発達についての尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討する。

２．方法

被調査者

鹿児島県の公立Ａ中学校の２年生男子 95 名・女子 96 名の計 191 名。

質問紙の構成

⑴　仲間関係位相尺度：保坂・岡村の仲間関係の発達の仮説にもとづいて，これまでに作成され

た斎藤（1986）の「友だちづきあいについての21項目」と，黒沢・森ら（2003）の「仲間関係発達尺度」を参考に原案を作成した。原案は，21項目（ギャング７項目，チャム７項目，ピア７項目）であった。同性の親しい友だちとの関係について，どの程度当てはまるかを尋ねるものである。回答は,「非常によくあてはまる」「ややあてはある」「どちらともいえない」「あまりあてはならない」「全くあてはまらない」の５段階評定で，回答をそれぞれ５点，４点，３点，２点，１点と得点化した。

⑵　友人との活動尺度：妥当性を検討するための尺度として用いる。榎本（2003）による「友人との活動の質問紙」で，友人とどのような活動をしているかを測定する，29項目から成る尺度である。榎本は，友人関係を「友人との活動」「友人への感情」「友人への欲求」の３つの側面からとらえ,「友人との活動, 友人に対する感情, 友人への欲求の質問紙」を作成している。このうち,「友人との活動の質問紙」は，青年期の友人の活動的側面の発達的変化について検討したものである。回答は,「とてもよくする」「よくする」「どちらかと言えばする」「どちらかと言えばしない」「あまりしない」「まったくしないしない」の６段階評定で，回答をそれぞれ６点，５点，４点，３点，２点，１点と得点化する。この尺度では，友人との活動を「相互理解活動」,「親密確認活動」,「共有活動」,「閉鎖的活動」の４つに分類し，これを下位尺度としている。これらの４つの活動のうち，相互理解活動については８項目すべてを，親密確認活動については９項目から７項目を，共有活動については８項目から７項目を取り上げ，合計22項目を用いた。閉鎖的活動の４項目は，対応するところがないため除いた。また，親密確認活動の「11. 交換日記をする」および「17. 一緒に習い事に行く」の項目と，共有活動の「23. 一緒にゲームセンターに行く」の項目は,時代や個々の環境を受けやすい等の理由により不採用にした。また,「18. 部屋の中でファミコンやゲームをする」の項目は,「ファミコン」という言葉を削除し,「部屋の中でゲームをする」と内容を一部改変した。

榎本（1999）は，相互理解活動は保坂・岡村（1986）の「ピア・グループ」に相当し，親密確認活動は「チャム・グループ」に，共有活動は「ギャング・グループ」に相当すると述べている。仲間関係位相の尺度において「ギャング」,「チャム」,「ピア」の因子が抽出され，それらの因子がそれぞれ,「共有活動」,「親密確認活動」,「相互理解活動」との相関が認められることにより，妥当性が確認できると考えられる。

⑶　独立－協調尺度：妥当性をみるための尺度で，高田（2000）による「児童・生徒用相互独立的－相互協調的自己観尺度」より，10項目を抜粋し，短縮版尺度とした。短縮版尺度の作成にあたっては，高田（2000）による，相互独立的－相互協調的自己観尺度の短縮版尺度として用いる採用項目に準じた。自分自身にどの程度あてはまるかを尋ね，回答は,「あてはまる」「すこしあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の５段階評定で, 回答をそれぞれ５点，４点，３点，２点，１点と得点化する。相互独立性についての下位尺度は,「個の認識･主張」と「独断性」である。また，相互協調性についての下位尺度は,「他者への親和・順応」「評価懸念」である。

高田（2000）は，相互独立性と相互協調性の年齢段階による相違を明らかにしている。そのなかで，相互独立性の平均得点は，男女ともに中学生よりも高校生の方が高い。相互協調性については，高校生の方が中学生よりも平均得点は高いが，評価懸念の得点については，高校生女子よりも中学生女子の方が高い。また，榎本（1999）は，友人関係の感情的側面についての尺度を作成し，そのなかの下位尺度「不安・懸念」については,「相互協調的自己観」に通じるところがあると考察で述べている。また，中学生女子の「不安・懸念」は，高校を経て大学へと年齢が上がるにつれて，平均得点は下がるという研究結果を示している。これらのことから，チャムに相当する時期には,「評価懸念」が強くなる傾向があり，チャムと「相互協調性」との間で正の相関が認められることが考えられ

る。したがって，相互独立性はピアと，相互協調性はチャムとの間で，正の相関が認められることにより，妥当性が確認できると考えられる。

手続き

調査は，2015 年 7 月に実施した。回答はすべて無記名で行われた。学級担任が，学級活動の時間に調査用紙を配布し，記入を求め回収した。

３．結果と考察

仲間関係位相尺度原案 21 項目について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。因子負荷量が .35 未満の項目および，複数の因子にまたがって因子負荷量が .35 以上の項目を削除した。その結果，解釈可能な 3 因子を抽出し，第 1 因子を「ピア」，第 2 因子を「チャム」，第 3 因子を「ギャング」と命名して，これら 15 項目を仲間関係位相尺度とした。各下位尺度の項目および因子分析の結果は Table 1 のとおりである。

次に，各下位尺度の平均点，標準偏差，α係数および下位尺度間の相関係数を Table 2 示した。下位尺度の相関を算出したところ，ギャングとピアとの間の相関はきわめて小さかったが，ギャングとチャムとの間，ピアとチャムとの間については，どちらも弱い正の相関（ .25）が認められた。これは，仮説にもとづくと，チャムとギャング，チャムとピアは発達段階が近接していることから，このような結果になったのではないかと考えられる。また，α係数は，Table 2 に示したとおり，十分に高いとはいえないが，項目数の少なさを考慮すれば一応の信頼性が認められると判断した。

Table 1　仲間関係位相尺度の項目内容と因子構造（主因子法・バリマックス回転後）

下位尺度と項目内容	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ．ピア			
友だちとは，考え方の違いがあっても本音で話せる	.745		
友だちだからお互いの意見をきちんと言い合える	.723		
違う考えを持つ友だちとも知り合いたい	.457		
他のグループの人たちとも，自然とつき合える	.455		
これからのそれぞれの生き方について話をする	.377		
自分とは違う性格の友だちともつき合ってみたい	.369		
Ⅱ．チャム			
友だちと意見や考え方が一緒だとほっとする		.658	
友だちのことを誰よりも知っていたい		.618	
仲の良い友だちと同じ持ち物を持っていたらうれしい		.595	
他の友だちと自分が仲良くなったら，今の友だちに悪いと思う		.493	
友だちとのメールや手紙のやりとりで，友だちの気持ちを知りたい		.472	
仲の良い友だちといつも一緒にいることで安心する		.443	
Ⅲ．ギャング			
追いかけたり，たたき合ったりして，ふざけ合うのが楽しい			.717
一緒にいたずらをするのがおもしろい			.673
友だちとは悩みを語り合うより，わいわい騒ぐ方が多い			.472
寄与率	13.00	12.73	8.48

累積寄与率 34.22%

Table 2　仲間関係位相尺度の下位尺度の平均値，α係数および相関係数（n=191）

下位尺度		M	SD	α	r	
					（2）	（3）
ピア	（1）	23.70	3.48	.69	.25	.16
チャム	（2）	20.87	4.23	.73	—	.25
ギャング	（3）	9.37	2.82	.66		—

Table 3　仲間関係位相尺度の下位尺度と妥当性を検討する下位尺度の平均値および相関係数

		友人との活動尺度（n=75）			独立－協調尺度（n=116）	
		相互理解活動	親密確認活動	共有活動	相互独立性	相互協調性
仲間関係位相尺度						
ピア	（1）	.518	.316	.213	.400	-.048
チャム	（2）	.236	.402	-.039	-.051	.494
ギャング	（3）	.148	.147	.244	.038	.061

次に，妥当性を検討するために，仲間関係位相尺度と友人との活動尺度との相関，独立－協調尺度との相関を確認した。その結果をTable 3に示す。

まず，友人との活動尺度の相互理解活動は，ピアとの間で中程度の正の相関（ .518），チャムとの間で弱い正の相関（ .236）が認められた。すなわち，相互理解活動は，それに相当するピアとの間で，より高い相関を示したと言えよう。次に親密確認活動については，チャムとの間で中程度の正の相関（ .402），ピアとの間に弱い正の相関（ .316）が認められた。すなわち親密確認活動は，それに相当するチャムとの間で，より高い相関を示したと言えよう。そして，共有活動については，ピアとの間に弱い正の相関（ .213），ギャングとの間に弱い正の相関（ .244）が認められた。どちらも弱い相関ではあった。共有活動は，それに相当するギャングとの間で，より高い相関を示したと言えよう。

これらの結果より，仲間関係位相尺度の３因子はそれぞれ，友人との活動尺度の相当する活動との相関が認められることから，併存的妥当性が確認できたと判断した。相互理解活動とチャムとの間に弱い正の相関が，親密確認活動とピアとの間でも弱い正の相関が認められた理由としては，仮説にもとづくと，近接している発達段階とその活動であるためであると考えられる。また，共有活動は，ピアとも相関が見られたが，その理由についてはよく分からなかった。

次に，独立－協調尺度との相関について述べる。ギャングは，相互独立性と相互協調性のどちらとも相関はほとんどみられなかった。チャムと相互協調性との間で中程度の正の相関（ .494），ピアと相互独立性との間で中程度の正の相関（ .400）が認められた。これらの結果より，チャムと相互協調性との間に，およびピアと相互独立性との間に相関が認められたことから，構成概念妥当性の一部が確認できたと判断した。

以上の結果より，仲間関係位相尺度について，一応の信頼性と妥当性が保たれていると判断した。

Ⅲ．研究２　仲間関係の発達と受容感およびネット利用との関連

１．目的

中学生を対象に研究１で作成した仲間関係位相尺度と，学級や学校における適応感としての受容感との関連および，ネット利用との関連を明らかにする。

２．方法

被調査者

鹿児島県の公立A中学校の２年生男子58名・女子58名の計116名。

質問紙

⑴　受容感尺度：秦（2000）による居場所感尺度（学校場面）の下位尺度である「受容感」のうち，因子負荷量の高い順に５項目を選んだ。今の学

級や学校ですごしているときの様子に，どの程度あてはまるかを尋ね，回答は，「あてはまる」「すこしあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の５段階とし，回答をそれぞれ５点，４点，３点，２点，１点と得点化する。

⑵　ネット利用についての質問紙：「ネット依存尺度」（総務省情報通信政策研究所，2014）を参考にネットの利用目的，ネット利用時間，友人関係におけるネットの利用状況などの質問項目を作成し，用いた。これらの質問に対し，最もあてはまる内容を選択してもらうものである。その内容を Table 4 に示した。項目１の質問以外は，回答は Table 4 で示したとおりにそれぞれ得点化した。

手続き

調査は，2015 年７月に実施した。回答はすべて無記名で行われた。学級担任が，学級活動の時間に調査用紙を配布し，記入を求め回収した。

３．結果と考察

仲間関係位相尺度の下位尺度と受容感およびネット利用との間で，相関分析を行った。Table 5 に平均値および相関係数を示した。

まず，仲間関係位相尺度の下位尺度と受容感との相関において，ピアと受容感との間に中程度の正の相関（ .488）が認められた。また，チャムとの間でも弱い正の相関（ .254）が認められた。受容感とピアとの間で相関が最も高い理由として，自立した個人として個別性，異質性を尊重できる段階であるため，周りの友人を受容でき，そのことが自分自身の受容感につながっているのではないかと推測される。また，受容感とチャムとの間でも弱い正の相関が認められた理由については，中学生はチャムの時期の真っただ中にいることから，チャムの特徴である友人との親密な関係により受容感が得られているのではないかと推測される。

次に，仲間関係位相尺度の下位尺度とネット

Table 4　ネット利用についての質問紙

質問項目と回答用選択肢	
項目１：あなたが，ふだん最も利用するネットの使い方は次のうちどれですか。	
ア．情報の検索	イ．友だちとのやりとり
ウ．オンラインゲーム	エ．家族とのやりとり
オ．その他	カ．まったく利用しない
項目２：あなたが，１日にネットを利用する時間は，平均としてどれくらいですか。	
１．まったく利用しない（１点）	２．30分以下（２点）
３．30分から１時間以内（３点）	４．１時間以上２時間以内（４点）
５．２時間以上（５点）	
項目３：あなたは，ネットを通じたメッセージやチャットのやりとり（LINEやカカオトークなど）を利用していますか。	
１．まったく利用しない（１点）	２．ほとんど利用しない（１点）
３．たまに利用している（３点）	４．よく利用している（４点）
項目４：SNSを利用したほうが，友だちとのつきあいがうまくいくと思いますか。	
１．まったくそう思わない（１点）	２．あまりそう思わない（２点）
３．少しそう思う（３点）	４．とてもそう思う（４点）
項目５：ネットをやっていて，今はやめておこうと思っていても，ついやってしまったり，すぐにはやめられなかったりすることがありますか。	
１．まったくない（１点）	２．ほとんどない（２点）
３．たまにある（３点）	４．よくある（４点）

利用の各項目との相関の結果について取り上げると，チャムと項目３との間に弱い正の相関（.263）が，また，チャムは項目４との間にも弱い正の相関（.280）が認められた。ギャングは，項目２との間に弱い正の相関（.264）が認められた。また，ネット利用の項目間では，項目２と項目３との間に中程度の正の相関（.501），項目２と項目５との間に中程度の正の相関（.465）が認められた。このことから，項目２のネットの利用時間は，項目３のチャットやメッセージのやりとりや，項目５のネット依存の傾向と関連があることが分かる。また，項目３と項目４との間に中程度の正の相関（.402），項目３と項目５の間に弱い正の相関（.379）が認められた。このことから，項目３のチャットやメッセージのやりとりと，項目４のSNS利用と友だちとのつきあいについての意識は関連があることが分かった。また，項目３は，項目５のネット依存とも関連があることが分かった。

次に，仲間関係と受容感との関連を調べるために，「チャム」と「ピア」の項目得点を用いて，群分けを行った。本研究においては，中学生の発達段階をとらえる際，チャムが中心となる時期であると考えることから，「ギャング」以外の「チャム」と「ピア」の２項目によって群分けを行うこととし，群分けは次のように行った。

まず，「チャム」と「ピア」それぞれの項目の合計点を算出した。そして，「チャム」の得点の平均値と「ピア」の得点の平均値をそれぞれ算出し，対象者がそれよりも低い場合には，低得点群，高い場合には，高得点群とした。その結果，チャムについては，20点以下が「低チャム群」，それ以上が「高チャム群」，ピアについては，23点以下が「低ピア群」，それ以上が「高ピア群」となった。次に上述の分類で得られた結果を組み合わせ，４分類（低チャム低ピア群／低チャム高ピア群／高チャム低ピア群／高チャム高ピア群）を設定した。

以上の分類によって設定されたチャム・ピア４群を要因とし，受容感を従属変数とした分散分析を行った。また，４群全体で有意差が認められたため，多重比較を行った。その結果，「低チャム低ピア群」と比較して，「低チャム高ピア群」，「高チャム高ピア群」の２群において，受容感の平均値が有意に高い値を示した（詳細はTable 6に示した）。また，対象となった中学校２年生は，発達段階として一般的にチャムの段階であろうと考えられるが，「高チャム低ピア群」は，「低チャム高ピア群」と「高チャム高ピア群」の２群よりも受容感の平均値が低かった。

これらの結果と，Table 5に示した仲間関係位相尺度と受容感との間の相関の結果と関連づけて考えると，ピアが高いことが受容感の高さにつながっているといえる。チャムの高低に関係なく，ピアが高い群は，異質性を認められることから周りの友人を受容することができるため，自分自身も受容されていると認識できるのではないかと推察される。「高チャム高ピア群」は，チャムも高いが，ピアの特徴を持ちあわせているため，より発達段階が進んでいるピアの特徴が表れているのかもしれない。また，「高チャム低ピア群」は，同調性が高く，仲間との関係を保つことを重要視する傾向があり，評価懸念や不安と隣り合わせで

Table 5　仲間関係位相尺度の下位尺度，受容感，ネット利用の項目２～５の平均値および相関係数（n=116）

尺度			M	SD	（2）	（3）	（4）	（5）	（6）	（7）	（8）
仲間関係位相尺度											
	ピア	（1）	23.70	3.48	.301	.145	.488	.121	.011	−.151	−.057
	チャム	（2）	20.87	4.23	—	.247	.254	.161	.263	.280	.240
	ギャング	（3）	9.37	2.82		—	.239	.264	.151	.103	.076
受容感		（4）	19.29	3.68			—	.129	.095	.053	.028
ネット利用	項目２	（5）	2.51	1.09				—	.501	.244	.465
	項目３	（6）	2.04	1.23					—	.402	.379
	項目４	（7）	2.27	0.89						—	.205
	項目５	（8）	2.24	1.08							—

Table 6　受容感の４群における平均値

	低チャム低ピア　群 (*n*=33)	低チャム高ピア　群 (*n*=21)	高チャム低ピア　群 (*n*=22)	高チャム高ピア　群 (*n*=40)	*F* 値	多重比較（Bonferroni）
	M (*SD*)	*M* (*SD*)	*M* (*SD*)	*M* (*SD*)		
受容感	17.30 (4.23)	20.48 (3.16)	18.64 (3.00)	20.68 (3.01)	6.99*	低チャム低ピア群＜低チャム高ピア群* 低チャム低ピア群＜高チャム高ピア群**

**:*p*<.01　*:*p*<.05

あることから，居場所としての受容感を持ちにくいと考えられる。「低チャム低ピア群」については，他の３群と比較して友人との活動があまり活発ではない群であるとしてとらえられ，そのために受容感が得られにくいと推測される。

次に，仲間関係の発達とネット利用との関連についてとりあげていく。はじめに，“あなたが，ふだん最も利用するネットの使い方は次のうちどれですか”という質問項目についての回答結果をFigure 1 に示した。これをみると，「情報の検索」が 53.1% と最も割合が高く，半数以上が情報検索のために最もネットを利用している実態が明らかになった。また，次に割合が高いのは，「友だちとのやりとり」（16.3%）であり，ネットの利用は，中学生の友人関係において，重要な位置を占めていることがわかる。

次に，先述のチャム・ピアの高低の組み合わせを基準とした４群を要因とし，ネット利用の各項目を従属変数とした分散分析を行い，その結果を

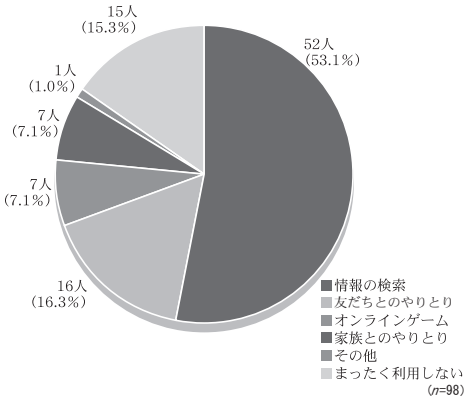

Figure 1　ネット利用についての質問紙項目１の度数分布

Table 8 に示した。項目２，項目３，項目５については，チャムとピアの４群の間に，有意差は認められなかった。項目４の「SNS を利用したほうが，友だちとのつきあいがうまくいくと思いますか」においてのみ，４群全体で有意差が認められたため，多重比較を行った。その結果，「低チャム高ピア群」は，「高チャム低ピア群」と比較して，「思う」という得点が有意に低かった。また，「低チャム高ピア群」は，「高チャム高ピア群」と比較しても，同じように，「思う」という得点が有意に低かった。また，「低チャム高ピア群」と，「低チャム低ピア群」との間には，有意傾向があった。つまり，「低チャム高ピア群」は他の３群より，SNS を利用したほうが，友だちとのつきあいがうまくいくとは「思わない」ことが示された。すなわち，友だちとのつきあいをうまくやるために SNS の利用をそれほど必要としていないと言えよう。また，「低チャム高ピア群」以外の３群は，SNS を利用したほうが，友だちとのつきあいがうまくいくと「思う」傾向にあることを示している。仲間関係の発達の観点から考えると，「低チャム高ピア群」は，他の３群と比較して，チャムのように相手と一体化を求めるのではなく，自立した個人として友人と付き合おうとするピアの段階に移行しつつあると考えられる。また，「高チャム高ピア群」については，ピア得点は高いものの，チャム得点も高いことから，チャムの特徴とピアの特徴の両方を有していると考えられる。受容感に関しては，より発達の進んだピアの特徴が表れているのではないかという推測を行ったが，SNS と友だちとのつきあいに関しては，チャムの特徴を残しているものと推測される。そのため，SNS を利用するこ

Table 8　ネット利用の４群における平均値

	低チャム低ピア　群 (n=33)	低チャム高ピア　群 (n=21)	高チャム低ピア　群 (n=22)	高チャム高ピア　群 (n=40)	F 値	多重比較 (Tamhane)
	M（SD）	M（SD）	M（SD）	M（SD）		
項目２	2.42	2.57	2.23	2.70	0.99	
	(1.25)	(1.12)	(0.81)	(1.07)		
項目３	2.00	1.90	2.18	2.08	0.20	
	(1.15)	(1.26)	(1.33)	(1.27)		
項目４	2.27	1.76	2.45	2.42	3.19 *	低チャム高ピア群＜高チャム低ピア群*
	(0.76)	(0.70)	(0.80)	(1.04)		低チャム高ピア群＜高チャム高ピア群*
						低チャム高ピア群＜低チャム高ピア群+
項目５	2.27	2.05	2.36	2.25	0.33	
	(1.07)	(1.20)	(1.14)	(1.00)		

* :p<.05　+ :p<.10

とによって友人との親密さを保つことの必要性を感じており，このような結果を示したと考えられる。以上より，これらの結果は，チャムとピアといった仲間関係の発達の特徴を示しているのではないかと考えられる。換言すれば，SNS を通じた友人とのつきあいにおいても，仲間関係の発達が進むにつれ，自立した個人としての意識が強まるという変化がみられることが示唆される。

項目２のネットの利用時間や項目５のネット依存については，チャム・ピアの高低の組み合わせを基準とした４群全体での差は認められなかった。また，項目３のネットを通じたメッセージやチャットのやりとりの利用の程度についても，４群全体での差は認められなかった。したがって，項目４の SNS の利用と友だちとのつきあいに対する意識についてのみ，有意差が認められたということからは，ネット利用の程度や友人間のメッセージやチャットのやりとりの程度とは関連がほとんどないということが考えられる。以上より，仲間関係の発達と SNS の利用と友だちとのつきあいに対する意識との関係が明らかになったといえよう。

Ⅳ．総合考察

研究１では，保坂・岡村（1986）の「ギャング・グループ」，「チャム・グループ」，「ピア・グループ」の仮説にもとづき，仲間関係の発達についての尺度を作成した。また，その尺度については，一応の信頼性と妥当性を確認できたと判断した。これまで仲間関係の発達について開発された尺度は，因子の項目内容が，若干，最近の仲間関係の発達の概念とは異なっている項目があること，発達段階の仮説にもとづいた因子が抽出されていない尺度であることなどの理由から，新たに仲間関係の発達についての尺度の作成を試みた。本研究で作成した「仲間関係位相尺度」においては，発達段階の位相を示す３因子を抽出できた。このことから，本尺度は，仲間関係の発達段階と，近年の友人関係に関わるさまざまな傾向，問題との関連を調べるのに有効なものであると考えらえる。また，チャムの遷延化や，ギャング・グループの喪失などが指摘されているが，このような現代における仲間関係の発達の状況についても本尺度を用いて今後検証できるのではないだろうか。

研究２では，研究１で作成した仲間関係位相尺度を用いて，受容感とネット利用の関係を調べ，受容感の高さがピアの高さと関連しているという

知見を得ることができた。中学生は一般的にチャムの時期と考えられているが，本研究では，受容感の高さはチャムの高さではなく，ピアの高さが関係していたということは，本研究の１つの成果であると言えよう。周りからの受容感が低いと，心理的適応を得ることができず，結果的に不適応や不登校につながることが多い。一方で，受容感が高ければ，不登校や不適応の抑制につながると考えられる。

仲間関係の発達については，学校段階や性差との関連がこれまでの研究で明らかになっている。しかし，同じ年齢でも発達段階に個人差があることにより注目し，学校適応などとの関連を検討することも重要ではないだろうか。また，最近，「チャムの遷延化」が指摘されているが，長くチャムにとどまることは，決して適応的であるといえないのではないかと推察される。しかし，一方で，「チャム」については，親密欲求を満たすのに重要な発達段階であるとも考えられ，例えば，須藤（2008）の研究において，チャム体験は発達促進的，治療的な性質があると指摘されている。また，対象とした中学２年生は，チャムの時期の真っただ中にいると考えられ，この時期における仲間同士の受容感は，ある程度高いと推測される。しかし，仲間同士の間においても，ピア・プレッシャーにより過剰に適応している場合もある。本研究では，学校適応との関連を調べることを目的の１つとし，仲間集団よりも学級や学校といった広い所属集団における受容感を尋ねたため，ピアの高さが受容感に関連したと思われる。今後，チャムについてはより詳細に検討し，適応感との関連を行うことが必要だろう。

さらに，本研究では，仲間関係の発達とSNSの利用と友人関係に関する意識についても知見を得ることができた。仲島・姫野・吉井（1999）は，若者の携帯電話の利用は，「フルタイム・インティメート・コミュニティ」を創造する効果があるとしている。「フルタイム・インティメート・コミュニティ」とは，特定多数の仲間とのコミュニケーションをより緊密にし，心理的に１日中一緒にいる気持ちになる効果のことである。総務省の調査（2015）において，若年層のコミュニケーションツールは，メールからソーシャルメディアに移行したと示されている。メールと比較し，ソーシャルメディアは，複数の友人と同時にコミュニケーションが可能であり，いつでも，どこでも，空間を共にせず，親しい仲間同士でコミュニケーションを行うことが可能になったと言えよう。仲島・姫野・吉井の研究から15年近く経過し，ソーシャルメディアに移行したことで，「フルタイム・インティメート・コミュニティ」による影響がこれまでよりもさらに懸念される。また，SNSを利用した学校での友人との親密確認行動が学校外でも家庭でも続けられているという状況は，黒沢・森ら（2002）が，親密さと同調圧力は，併存し表裏をなすものであると考察しているように，同調性や排他性を高めている可能性が高いと推察される。なお，友人との親密な関係において，親密さを確認するようなコミュニケーションを「フルタイム」で行わなければならないという感覚に陥ってしまうことにより，過度の緊張下におかれている可能性がある。「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査結果報告書」（2013）では，中学生は，友人とのコミュニケーションを目的として利用しており，ソーシャルメディア内の人間関係やトラブルに対して不安や悩みを持ちやすく，メッセージを即座に返信するなどソーシャルメディアでの友人関係にも気を遣っていることが窺える。これらの調査や研究の内容は，仲間関係の発達段階の視点から，思春期特有のメンタリティとの関連をよく示すものと考えられよう。

以上の内容をふまえ，学校現場においては，仲間関係の発達の観点から，不適応や不登校の予防的な取り組みとして，学校または学級における仲間関係の発達を支え，促進する取り組みの検討が必要なのではないだろうか。まず，ピアは，自立した個人として異質性を認めることが可能な集団であることから，学校での様々な場面において，仲間関係の発達を促すことをねらいとし，ピアの特徴を生徒が，日常的に取り込んでいくことができるような手立てが必要であろう。例えば，教師は，授業などのフォーマルな場面において，ピアの特徴を生徒が取り込むような展開や工夫が必要であると考える。また，学級などの準拠集団にお

いて，集団の不安や緊張を低め，意図的に生徒一人一人の個性や持ち味を生かす取り組みを日常的にできるだけ豊富に行っていくことが重要ではないだろうか。そのような経験により，インフォーマルな仲間関係においても，同調性や排他性を強めるのではなく，ピアの特徴である異質性に対する寛容さを取り込むことができるのではないだろうか。仲間関係の発達を援助・促進する基盤となるのは，やはり身近な周囲の友人である。学校現場において，仲間関係の発達の観点をもち，生徒の友人関係を観察し，必要な手立てを行うことが重要であろうと考える。

最後に，本研究の課題について述べる。まず，受容感の課題としては，質問紙の関係上，「居場所感」の１つの側面として「受容感」のみを取り出したため，他の居場所感の側面との関連を明らかにすることができなかった。他の居場所感に関する尺度の側面として，「安心感」，「本来感」，「自己存在感」，「自己有用感」，「充実感」，「連帯感」，「高揚感」，「自由の確保」，「場との一致感」などが見出されている（西中，2014）。今後，仲間関係の発達段階と，特に関連の深い居場所感との関連を調査する必要がある。次に，ネット利用に関しては，友人関係とネット利用による関連をより多面的に調べることである。本研究では，SNS や仲間関係の発達とネット利用がどのように関連しているのかを検討するため，ネット利用について幅広い視点で質問紙を構成した。本研究の対象者は，「情報の検索」をネット利用の目的としている割合が最も高かったが，SNS や友人とのやりとりと関連があった。そこで，友人関係や友人とのやりとりに内容に絞って質問項目をより多く設けた場合，仲間関係の発達との関連をより明らかにすることができるのではないかと考えられる。また，SNS を利用することがなぜ，友だちとのつきあいがうまくいくことにつながると思うのか，その理由を尋ねることで，ネット利用と友だちとのつきあいの関連をさらに詳細に調べることができるのではないか。友人関係は，学校生活を基盤として成立し，仲間と直接的な触れ合いや，さまざまな経験の共有によって，維持，発展していくと考えられていた。近年では，ネットの利用によって，友人とのコミュニケーションや活動が様変わりし，親密な友人関係を維持するための気遣いや努力が必要となってきているようである。また，ネット依存やトラブルといった問題だけでなく，若者の社会性や情緒面および質的なコミュニケーションの発達への影響が危惧されている。近年の若者の友人関係の特徴である過度の気遣いや希薄化が，ますます進むのではないかということも懸念されている。仲間関係の発達と上述の問題との関連を検討することも，今後，視野に入れていきたいと考えている。

その他の課題として，本研究は，中学２年生のみの調査であったため，他学年の特徴や，他の学校種との違いみることができていない。また，尺度項目が社会的望ましさの影響を受けている可能性も否めない。今後はさらに研究の対象となる学年や学校種を広げたり尺度構成の改善を図るなどして，仲間関係の発達について研究を継続していきたい。その際には，学校や学級，仲間関係においてうまく適応できている要因を明らかにし，不登校，不適応の予防的な手立てや開発的な支援について検討していく。また，性差を比較検討し，仲間関係の発達段階の特徴を踏まえ，学校適応につながる友人関係について，さらなる検討を行う必要がある。

≪謝辞≫

調査に協力していただいたＡ中学校の先生方と生徒の皆様，および本尺度の作成にあたり，予備調査に協力していただいた大学生の皆様に，この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

【文献】

石本雄真（2011）現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連 . 発達研究，25，13-24.

榎本淳子（1999）青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化 . 教育心理学研究，1999，47，180-190.

榎本淳子（2003）青年期の友人関係の発達的変化 : 友人関係における活動・感情・欲求と適応 . 風

間書房.
岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森　俊夫・矢富直美（1992）中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係 . 心理学研究 , 63 ⑸ , 310-318.
大久保　智生（2005）青年の学校への適応とその規定要因　―青年期適応感尺度の作成と学校別の検討―．教育心理学研究，53，307-319.
加藤千枝（2013）「SNS 疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態 ―高校生 15 名への面接結果に基づいて―社会情報学 , 2 ⑴ ,31-43.
黒沢幸子・森　俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子（2002）「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発 ―スクールカウンセリング包括的評価尺度（生徒版）の開発の一環として―．研究助成論文集（安田生命社会事業団編集）, 38-47.
黒沢幸子・有本和晃・森　俊夫（2003）仲間関係発達尺度の開発 ―ギャング、チャム、ピア・グループの概念にそって―．目白大学人間社会学部紀要 , 3,21-33.
小寺敦之（2009）若者のコミュニケーション空間の展開 ― SNS「mixi」の利用と満足，および携帯電話の利用との関連性―．情報通信学会，27 ⑵，55-66.
斎藤憲司（1986）思春期における友人関係の発達的変化 . 東京大学大学院修士論文.
Sullivan, H.S.（1953）: Conceptions of Modern Psychiatry.W.W.Norton.［中井久夫・山口隆訳（1976）：現代精神医学の概念．みずほ書房］
須藤春佳（2008）前青年期の親しい同性友人関係“chumship”の心理学的意義について：発達的・臨床的観点からの検討 . 京都大学大学院教育学研究科紀要，54，626-638.
総務省（2015）平成 26 年版情報通信白書.
総務省情報通信政策研究所（2013）青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査 調査結果報告書.
総務省情報通信政策研究所（2014）高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書.
高田利武（2000）相互独立的―相互協調的自己観尺度に就いて．奈良大学総合研究所所報，8，145-163.
手塚千恵子・古屋　健（2001）前青年期から青年期にかけての友人関係の変化．教育心理学会第 43 回総会発表論文集，213.
仲島一郎・姫野桂一・吉井博明（1999）移動電話の普及とその社会的意味 . 情報通信学会誌 , 16, ⑶ , 79-92.
西中華子（2014）児童期・青年期における居場所に関する一考察：居場所感の視点から . 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8（1），151-164.
秦　彩子（2000）「心の居場所」と不登校の関連について．臨床教育心理学研究 ,26 ⑴
保坂　亨・岡村達也（1986）　キャンパス・エンカウンター・グループの発達的治療的意義の検討．心理臨床学研究，4（1），17-26.
保坂　亨・岡村達也（1992）キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 . 千葉大学教育学部研究紀要 , 40, 113-122.
本間友己（2000）中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析．教育心理学研究，48 ⑴
文部科学省（1992）学校不適応対策調査研究協力者会議報告（概要）「登校拒否問題への対応について」.
文部科学省（2014）平成 25 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
有倉巳幸・乾　丈太（2007）児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究．鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編 , 58, 101-107.

付記

本研究は，九州心理学会第 76 回大会（於大分県立芸術文化短期大学）において発表した内容を大幅に加筆修正したものである。